

表 3-4 アクアの利用経路

アクアの利用経路	度数	%
商店街での買い物・飲食に使った	9	19.6
八ヶ岳アートフェスティバルで使った	0	.0
寄付した	0	.0
お手伝いのお礼として家族に渡した	0	.0
お手伝いのお礼として親戚に渡した	0	.0
お手伝いのお礼として友人・知人に渡した	0	.0
お手伝いのお礼としてその他の人に渡した	1	2.2
家族にあげた	0	.0
親戚にあげた	0	.0
友人・知人にあげた	0	.0
その他の人にあげた	1	2.2
温泉で使った	1	2.2
その他	1	2.2
全ケース数	46	100.0

表 3-5 アクアの利用回数

アクア利用回数	度数	%
1回	2	18.2
2回	1	9.1
3回	3	27.3
4回	3	27.3
5回	2	18.2
合計	11	100.0

表 3-6 アクアの平均利用額

平均利用額	標準偏差
37,900	92566.4

表 3-7 アクア利用者の職業

アクア利用者の職業	度数	%
会社員・団体職員	2	18.2
会社役員・団体役員	2	18.2
公務員	0	.0
商工自営業	5	45.5
専業主婦・主夫	0	.0
アルバイト・パート	0	.0
年金生活者	0	.0
無職	1	9.1
その他	1	9.1
合計	11	100.0

第 2 節 世代間による報酬観の違い

上述のようにアクアはボランティアサービスや相互扶助の対価としてあまり利用されなかった可能性が高い。今後、アクアを商店だけでなく、相互扶助サービスにも利用可能にするための制度設計を考えていく必要がある。その際、重要な論点として世代ごとの報酬観の相違が挙げられる。若年層と壮高年層とではボランティアサービスや相互扶助やその報酬に対して異なる見方を持っているかもしれない。仮に、異なる報酬観が見られるとすると、違いに応じた仕組みを作っていくこともできるであろう。

従来の地域通貨研究は地域通貨を含む報酬に対する世代ごとの意識の違いについては詳細に調査しなかったが、意識や報酬観を調査することにより、地域通貨の流通を促進できるスキームを設計できるのではないだろうか。これまで見てきたように葦崎市・北杜市では地域通貨の利用者に偏りが見られ、地域住民に浸透してきたとは言い難い。今後、アクアの流通を後押ししていくためには、各世代の持つ意識や報酬観に基づいた仕組みを作っていくことが必要になる。そこで、本節では、世代ごとに相互扶助や報酬観にどのような違いが見られるか検証する。年代は 39 歳以下をグループとする若年層と 40 歳以上をグループとする壮高年層に分けた。

第 3 節 相互扶助の状況—若年層と壮高年層の違い—

表 3-8 は若年層と壮高年層の相互扶助の状況に関して平均値と標準偏差を示したものである。地域コミュニティに頼れる人がいるかどうかという質問（「まったくいない」、「ほとんどいない」、「どちらともいえない」、「少しいる」、「たくさんいる」の 5 段階評定）と相互扶助に対する意欲（「まったく思わない」、「あまり思わない」、「どちらともいえない」、「やや思う」、「強く思う」の 5 段階評定）や実践に対する質問（「まったくくない」、「ほとんどな

い」、「どちらともいえない」、「時々ある」、「いつもある」の5段階評定)では、若年層に比べ、壮高年層の平均値が高く統計的にも有意であった。このことは、若年層が壮高年層に比べ相互扶助に対してあまり興味がなく、実際にも行っていないことを示している。この理由はいくつか考えられる。第1に、若年層は壮高年層に比べ体力的に充実し、助け合うという行為の重要性に対して比重を置いていないのではないか。壮高年層は加齢とともに援助を必要とする機会を多く持つことにより、助け合うという行為が重要であると考えられるようになる。第2に、若年層は壮高年層に比べて、地域コミュニティに活動の拠点をあまり置いていないことが影響しているのではないか。地域コミュニティに活動拠点があれば、相互扶助の機会にも多く遭遇する可能性が高いただろう。

では、若年層と壮高年層の地域コミュニティにおける人的つながりには違いが見られるだろうか。アンケートでは、無尽参加の状況を聞いている。無尽とは山梨県で古くから伝承される社会制度であり、地域コミュニティでの相互扶助を促進するものである。無尽参加の状況を調べることにより、回答者が生活の基盤を地域コミュニティに置いているのか置いていないのかを調べるができるかもしれない。図 3-1 は若年層と壮高年層の無尽参加の状況を示す。図 3-1 を見ると、壮高年層は若年層に比べ無尽参加率が圧倒的に高いことがわかる。このことから、壮高年層は無尽のネットワークに参加する傾向が強く、結果として相互扶助の機会を多く持つが、若年層はそのようなネットワークに参加する傾向が弱いため、結果として相互扶助に接する機会を多く持つことができないという解釈ができそうだ。

地域コミュニティにおける活動状況についてさらに詳しく調べてみよう。図 3-2 は、若年層と壮高年層の地域行事の参加状況を示している。使用した質問項目は地元地域主催のお祭り（盆踊りなど）、防災訓練、公民館や文化ホールでのイベント、タウンミーティングへの参加状況である。図を見ると、どのイベントにおいても若年層は壮高年層に比べ地域コミュニティの行事への参加頻度が少ない。このことから若年層は活動の場をあまり地域コミュニティに置いていないということがわかる。そのため、地元地域において相互扶助の機会をあまり多く持たない可能性が高い。逆に壮高年層は活動の場を地元地域に置いていることが多いため、地元地域の人との相互扶助の機会に恵まれる。

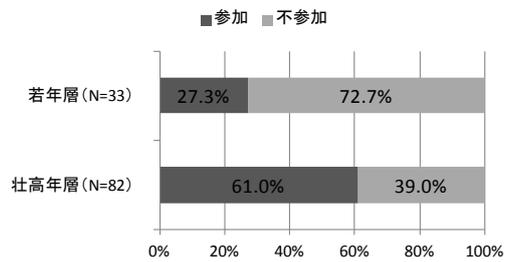
以上のように、若年層と壮高年層とでは相互扶助に対する興味関心や実践に関して大きな違いが見られることが明らかとなった。この結果を踏まえると、若年層と壮高年層とでは相互扶助の対価として受け取ることでできる報酬に対しても異なる考え方を持っている可能性が高いことが示唆される。相互扶助の経験を多く持つ人は、それを慣習と捉える可能性が高いため金銭による対価を求めず、経験をあまり持たない人は相互扶助をサービスの交換と捉える可能性が高いため金銭による対価を求めるかもしれない。次節では、若年層と壮高年層とで報酬観に違いが見られるかどうか検証してみる。

表 3-8 相互扶助意識と実践の違い

	若年層(39歳以下)		壮高年層(40歳以上)		t値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
Qいざという時、お住まいの地域に頼れる人はいますか	3.58	1.001	3.90	0.9	-1.723 *
Q地元地域の人と必要なときは、互いに助け合いたいと思いますか(留守中の郵便物の受け取りなど)	4.06	0.827	4.45	0.59	-2.441 **
Q地元地域の人と必要なときに、実際に助け合うことはありますか	3.64	1.025	4.20	0.741	-2.889 **

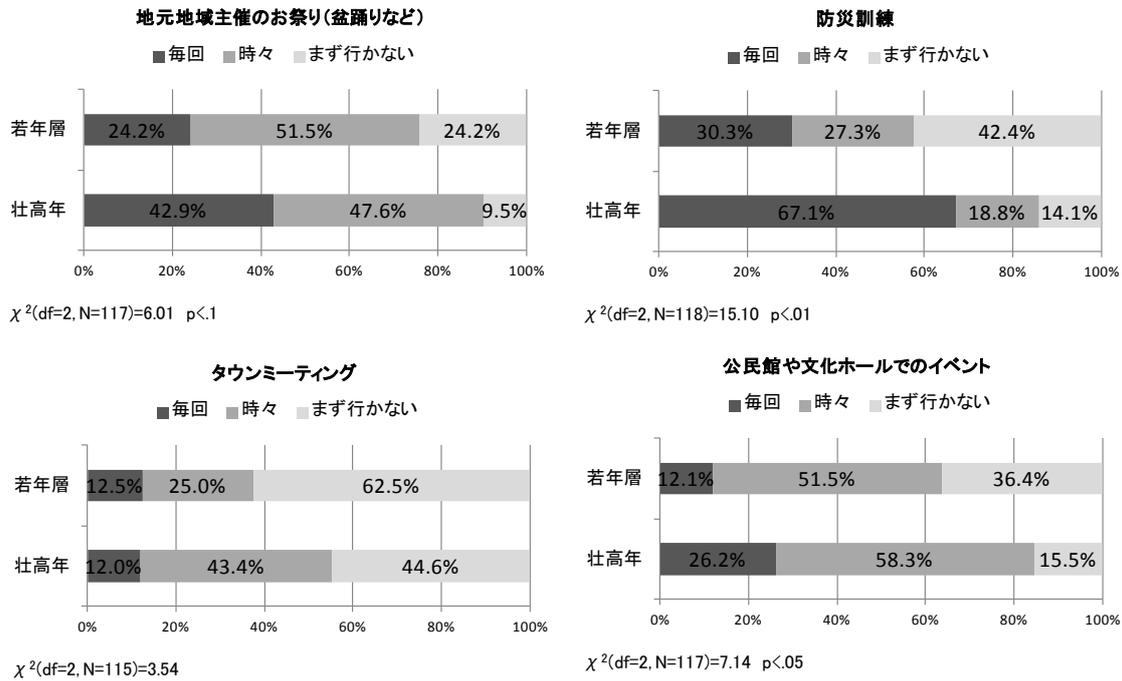
*:<.1; **:<.05; ***:<.01(両側検定)

図 3-1 無尽参加の状況



$\chi^2(df=1, N=115)=9.39$ $\phi=-.305$ $p<.05$

図 3-2 行事参加の状況



第 4 節 世代間のボランティアサービスに対する報酬観の相違

若年層と壮高年層とで報酬観の違いが見られるかどうか検証するため、各種ボランティアサービスの対価として現金を受け取る場合、渡す場合と地域通貨を受け取る場合、渡す場合とで意識に違いが見られるか調べた。図 3-3 を見ると、各種ボランティアサービスの対価として現金を受け取ることに對する意識に関して世代間で大きな違いが見られる。若年層は各種ボランティアサービスの対価として現金を受け取ることに對して抵抗感がないが、壮高年層は抵抗感を示している。特に、子育てサポート、高齢者介護、高齢者サービスなどのケアに関する報酬観に大きな相違が見られる。地域通貨に関してはどうか。図 3-4 を見ると、有意傾向を示したのは隣人の手伝いに対する報酬観のみであったが、若年層に比べ壮高年層が地域通貨を受け取ることが妥当であると評価している。

次に、対価を渡す場合について見てみよう。図 3-5 を見ると、隣人の手伝いを除いて、若年層は壮高年層に比べ、各種ボランティアサービスの対価として現金を支払うことに對してあまり抵抗感がなさそうだ。特に、子育てサポートと高齢者介護に関しては、若年層の過半数が対価として現金を渡すことが妥当と考えている。

地域通貨の場合はどうか。図 3-6 を見ると若年層は壮高年層に比べ地域通貨が妥当であると評価していないようだ。逆に壮高年層は地域通貨を対価として渡すことが妥当であると考える傾向が強い。

以上の点を整理すると、若年層は壮高年層に比べ現金志向が強く、ボランティアサービスの対価として受け取ることに對してあまり強い抵抗感を示さない。逆に、壮高年層は、

ボランティアサービスの対価には現金が馴染まないと考える傾向が見られる。地域通貨に関しては、若年層よりも壮高年層が妥当な報酬として評価する傾向が見られる。若年層はどこでも利用可能な現金に対する志向性が強いため、地域内でのみ利用可能な地域通貨を過小評価しているようだ。このことを裏付ける別のデータも存在する。図 3-7 は、若年層と壮高年層の生活志向の違いを示している。若年層は壮高年層に比べ物質的な面に重きを置く傾向が強く見られる。つまり、若年層は壮高年層に比べて、金を稼ぎモノを購入・消費する生活スタイルを重視している。また、図 3-8 はお金儲けに対する評価の違いを示すが、若年層は壮高年層に比べてお金儲けが良いと考える傾向が強く見られる。

図 3-3 ボランティアの対価—現金を受け取る場合—

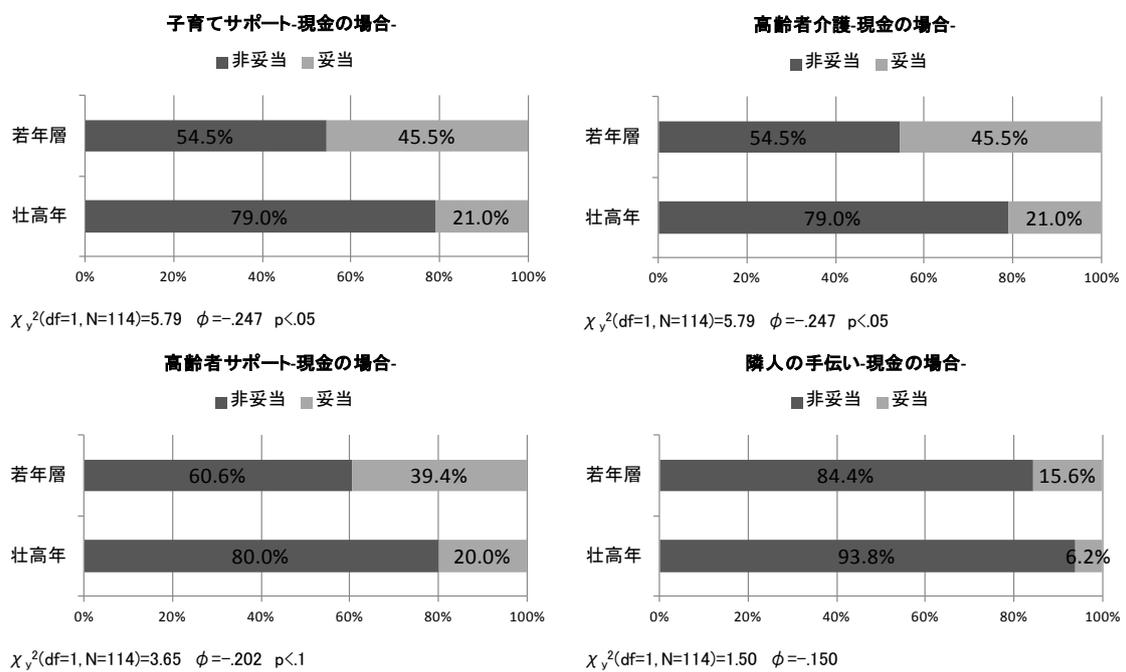


図 3-4 ボランティアの対価—地域通貨を受け取る場合—

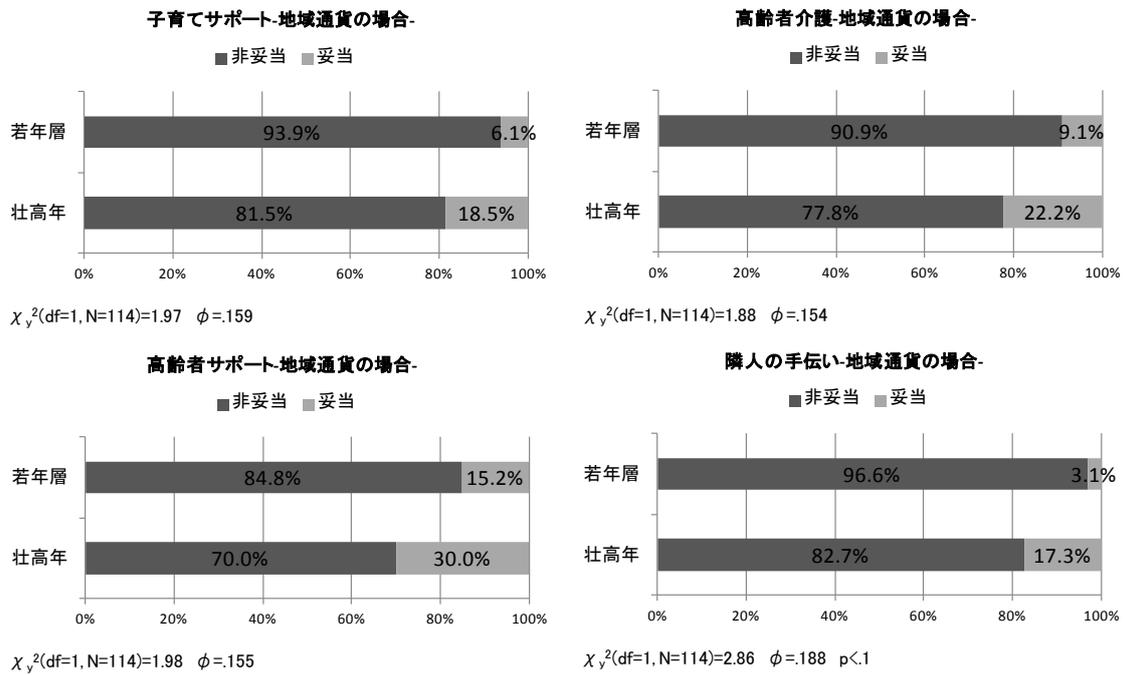


図 3-5 ボランティアの対価—現金を渡す場合—

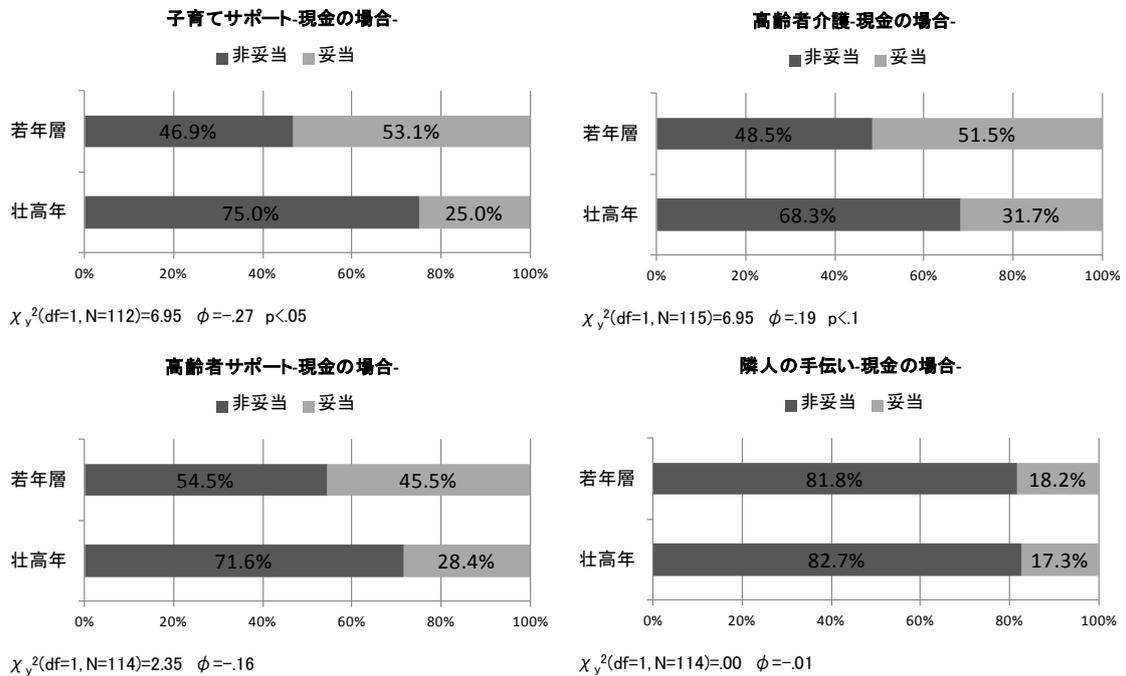


図 3-6 ボランティアの対価—地域通貨を渡す場合—

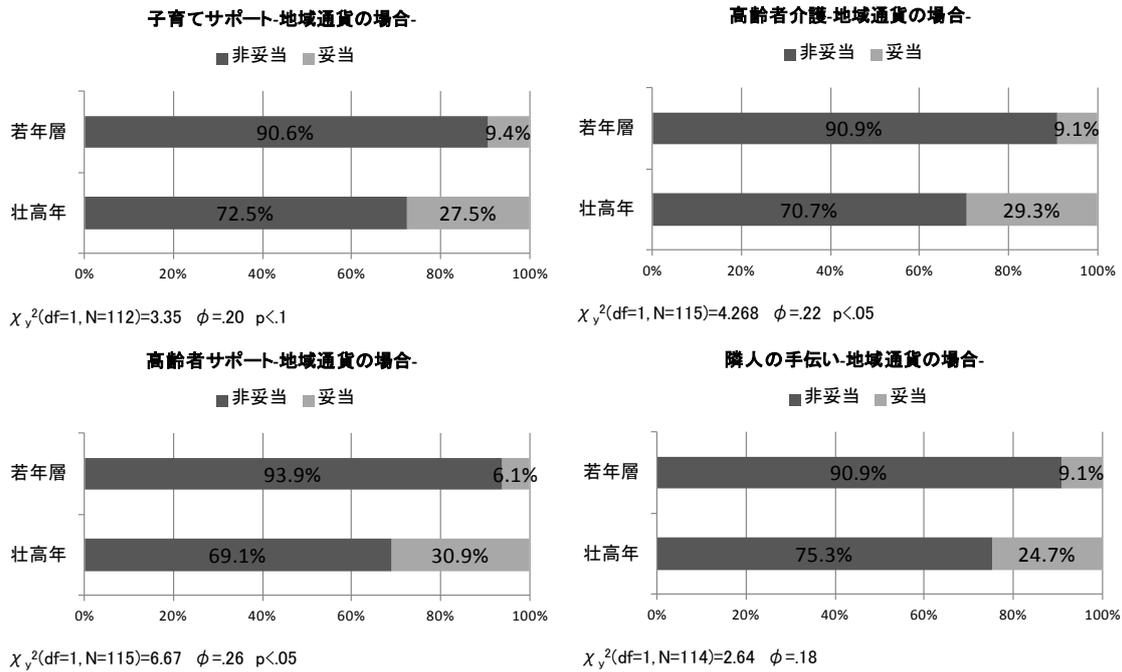


図 3-7 若年層と壮高年層の生活志向の違い

今後の生活において、物の豊かさか心の豊かさに関して、次のような2つの考え方のうち、あなたの考え方に近いのはどちらでしょうか

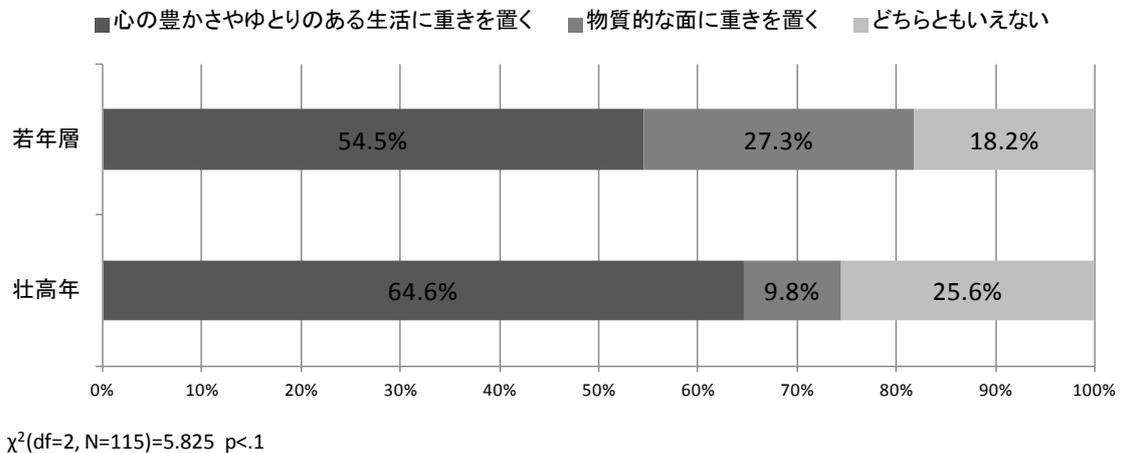
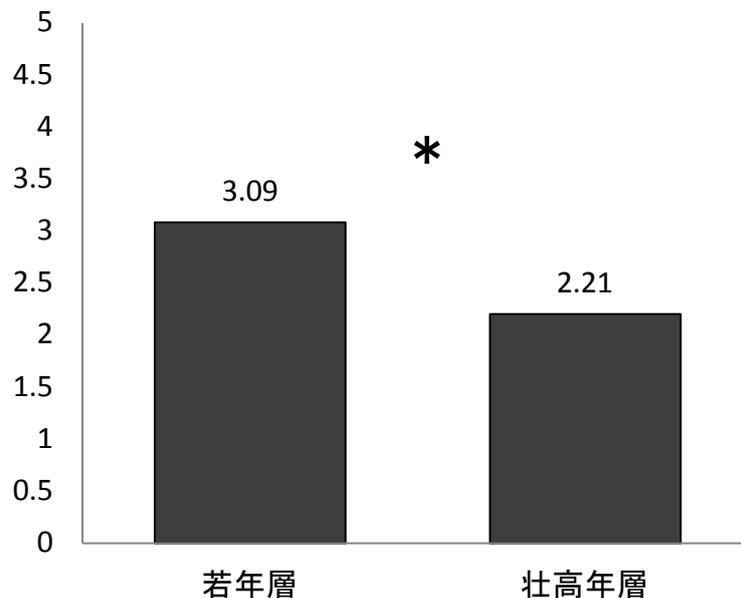


図 3-8 「お金は儲ければ儲けるほどよい」に対する回答結果の比較 (* : <.05)



第5節 小括

以上の分析結果を踏まえると、現状においては、若年層は壮高年層に比べボランティアサービスを相互扶助ではなく、報酬が生じる労働に近い感覚で評価していると言えよう。これらの意識を反映してではないかと思われるが、若年層は壮高年層に比べ地域通貨が現金よりも使い道の少ない、劣る通貨であるなどネガティブなイメージを抱いているのかもしれない。他方、壮高年層は、若年層に比べボランティアサービスの対価として現金を渡すことに抵抗感を覚えている。また、壮高年層は地域通貨であればボランティアサービスの対価として妥当と考えるなど、地域通貨をポジティブに捉える傾向が見られる。こうした若年層と壮高年層の世代間で各種ボランティアサービスに対する報酬観の違いが生じるのは、グローバル化による市場化という流れの中で、ボランティアや相互扶助といった非商業的サービスの商品化がいまも進行しており、若い世代の方が自らの価値意識をそれに適応させているからだと考えることができる。

以上の分析結果より、今後のアクア流通の普及に役立つかもしれない有効な知見が得られた。今後、アクアをボランティアサービスの対価としてより広く利用してもらうためには、ボランティアの対価としてアクアに良いイメージを持っている壮高年層にその意義を強く訴え、働きかけていく必要があるようだ。それと同時に、若年層に対しては、地域通貨のボランティアの対価としての非商業的側面よりも、商店街で利用可能であるなど商業的側面をより強く訴えていくことにより、その意義を働きかけることができるであろう。彼らは、壮高年層よりも物の豊かさに重きをおいているからである。例えば、地域通貨の販売プレミアム率を高める、地域通貨を地元地域の商店街のみならず、彼らが良く利用するような店舗での地域通貨の利用も視野に入れて制度設計を行うことが望ましいであろう。

このように各層のニーズを意識しながら地域通貨の制度設計（メディア・デザイン）を行うことによって、地域通貨の流通を促すことができれば、ひいては地域通貨を媒介にしてコミュニティ内に商業・非商業のつながりや世代間の交流をもたらし、そうした交流の創発が各世代の価値意識の変容を促す効果を持つ可能性がある。

おわりに

今回の調査分析の成果と課題を、以下、メディア・デザインとコミュニティ・ドックの各々について振り返ってみたい。

まず、地域通貨「アクア」のメディア・デザインについて述べよう。「アクア」の発行者である韮崎JCの主要メンバーに紙券流通データを捕捉することの意義を理解してもらい、紙券裏に取引データの記載欄を設けたため、流通速度や流通ネットワークの分析ができた。これにより、地域通貨を発行・運用した場合の経済効果を事後的に検証することができるようになったことの意味は大きい。アクアでは、プレミアム率と換金手数料率をともに5%とすることで、両者の差額の鞘抜きを防ぐことができ、また、換金手数料率を5%とすることで、アクアを受け取った商店が他の商店で使うインセンティブを高め、複数回流通を促進することができた。実際、流通ネットワーク分析の結果から、一部の商店間取引において複数回流通が実現していたことがわかったが、このことも、不完全ながら取引データをトレースできるからこそ検証することができたのであった。もちろん、紙券デザインや流通スキームには問題があり、また、紙券裏の取引データ記入欄のデザインは完全ではなかった¹³。例えば、額面金額は525アクアとしたが、5%のプレミアム分（25アクア）が含まれているので、おつりが出ない本紙券の利用は難しいという問題も生じた。また、地域通貨「アクア」は各種ボランティアに参加した市民に配布されたが、利用者への記載協力は十分に徹底されなかったため、ボランティア参加者を經由する流通ネットワークを可視化することに成功していない。今回のアクアの事例では、全般的に、利用者による取引データの記載率があまり高くなかったのではないかとこの疑問も残る。記載率がもっと高ければ、流通ネットワークのリンクはより太く、緊密になっていたであろうし、流通速度はもっと高くなっていただろう。しかし、不完全ながらも地域通貨「アクア」の流通実態を知ることができ、地域通貨のパラメータの設定の効果を見ることができたのは、今回のメディア・デザインの成果であると考えられる。

次に、地域通貨「アクア」のコミュニティ・ドックについて、現時点での総括をしておく。今後の課題は少なくないものの、われわれ研究者と実施主体である韮崎JCとの間で事前協議を行い、両者の協働関係を築くことができたことなど、コミュニティ・ドックの手法を初めから実践することができたことは、今後につながる一つの達成である。これまでわれわれは北海道苫前町（西部ほか、2005, 2006）や東京都武蔵野市（栗田、2010）で同様の調査分析を行ってきたので、そうした経験に基づいて地域ドックの方法、意義、手順に

¹³ 韮崎JCが紙券裏面に「アクア」取扱店（加盟店）の一覧を載せたため、取引データの記載領域がその分小さくなり、利用者の住所（地区）欄、特定事業者の押印欄がなかったことが一因であろう。

については事前によく自覚していた。しかしながら、共著者の多くがいる北海道と山梨県は距離的に多く、頻繁に現地を訪問したり、韮崎 JC と会合を開いたりすることは資源・時間上の制約のために困難であった。アンケート調査の結果が必ずしも芳しくない理由はそこにあるのかもしれない。事前のアンケート調査によりベースラインを設定できたのはよかったが、事前と事後の両方のアンケート調査に協力してくれた回答者は少なかったこと、しかも、回答者にアクア利用者がきわめて少なかったことは、アンケートの配布回収法、回答者へのインセンティブ設定を再検討すべきであることが課題として残った。とはいえ、コミュニティ・ドックにおいて期待される、アクア利用による利用者の内なる制度（貨幣意識や報酬意識などの価値や規範）の変容には時間がかかるので、それをこうした短期間の内に検証することはそもそも困難であることも確かである。他方、山梨県は「無尽」が盛んな土地柄であるということもあり、若年層と壮高年層の間に相互扶助やボランティアに関する報酬観の違いがあることを見ることができたのは、それがアクアの今後の普及の仕方に示唆を与えるものであることを考慮するならば、一定の成果であると考えられる。

地域通貨「アクア」の取り組みにおいて、地域の住民や諸団体、行政の認知や参加が十分ではなく、また、あくまで記念行事的な色彩が強かったことから、継続的に行われていく取り組みとなるかが危ぶまれた。しかし、実施前後の著者らによる講演、調査、討議を通じて、実行委員の中心メンバーの価値や意識に変容が生じ、実施終了後も「アクア」を継続的に取り組んで行こうとする意志の醸成にも役立った。また、地域商品券に傾注していた韮崎市商工会議所が次回の「アクア」の取り組みへの協力を申し出るなど、周りに対しても影響を与えつつある。

参考文献

- Bollobas, B. (1984), "The evolution of sparse graphs," In B. Bollobas (ed.), *Graph Theory and Combinatorics*, Academic Press, pp. 35–57.
- Seidman, S. B. (1983), "Network structure and minimum degree," *Social Networks*, Vol. 5, No. 3, pp. 269–287.
- Watts, D. J. (1999), *Small Worlds: The Dynamics of Networks between Order and Randomness*, Princeton University Press. (訳『スモールワールド—ネットワークの構造とダイナミクス』東京電機大学出版局, 2006年)
- 栗田健一 (2010) 『地域通貨プロジェクトの効果と課題—学際的アプローチに基づく地域コミュニティ活性化の評価と考察—』北海道大学, 博士学位取得論文.
- 西部忠編著, 草郷孝好, 穂積一平, 吉地望, 吉田昌幸, 栗田健一, 山本堅一, 吉井哲著 (2005) 『苫前町地域通貨流通実験に関する報告書』北海道商工会連合会.
- 西部忠編著, 草郷孝好, 穂積一平, 吉地望, 吉田昌幸, 栗田健一, 山本堅一, 吉井哲著 (2006) 『苫前町地域通貨流通実験報告書』苫前町商工会.